私は、阿仏尼のように、一人で京都から歩くわけにも参りませんでしたので、だいたいのポイントをつかみ、その近くまで電車で行き、そこから一部分だけを歩くことに致しました。それでも旧道に出るには、一時間に二本か、もっと間遠にしか出てないバスに乗って田舎道をガタガタ揺られながら行かなければいけない所がいくつもありました。しかし、旧道にはまだ所々に松並木が残っていて、そこでは、昔の旅人姿で歩いていても決して不釣合には感じられない、何とも言えない情緒がただよっていました。また、現在、公害で大問題になっている田子の浦にも行きました。田子の浦という所は富士山を眺めるのに最もよいとされており、万葉の時代から、数々の歌人に詠まれて来たところですので、私も当時期待して行ったのです。その頃は、まだ公害があまりうるさく言われていない時でしたが、その場所に立って驚いてしまいました。まるで水とは言えない鉛色のドロッとした、いわゆるヘドロです。阿仏尼が見たら、一体何と和歌に詠むでしょうか。

夏休から十月頃まで、ほとんど実際に見て歩きました。ある所は、知合の人に頼んでドライブをしながら、又京都には大文字焼の頃を狙って、夏休みを大いに、勉強に観光も兼ねて有効に過ごしました。ただ観光だけではなかなか気がひけて出かけられませんが、そこに卒論という一つの大きな隠蓑があるものですから、堂々と出歩きました。これには両親も一言の文句もつけられません。

一通り歩いてみて、現在は高速道路、新幹線等が出来、まるで比較にならないような変りようです。これから、十年、二十年先、私の歩いた所はまたどのように変って行くのでしょうか。十数年先、学生時代のときのように辞書とノートを片手に、カメラを肩にかけて、同じ所をもう一度是非歩いてみたいと思っております。必ずまた歩きます。

〈ヤマトタケル物語と古代豪族尾張氏〉

第二回卒業　田中　とみゑ

十二月に入ったら、清書をはじめなければいけませんと注意されていたのに、まだ下書きが終ってなかったのです。毎晩遅くまで参考書や辞書を繰ったりして……そのような毎日の中で浅草観音様の羽子板市がはじまりました。誘われて出かけて行く気になったのも、困った時の神頼み、その時お願いしたのは、きっと無事に卒業できますようにと祈ったのではないかしら。もう何年前になるでしょう。

テーマは『古事記』の倭建命伝説にとりました。タケル伝説の形成過程をその担い手を採ることにより、現在みる伝説の裏にうごめく生々しい古代の世界の片鱗でも汲取りたいと思ったのです。資料を多く史学方面から参考にした為か、畑違いのことに興味を持ち、その結果論文も史学的すぎてしまったようでした。国文科と云うもっとも自己をみつめ、テーマの中に自分というものを掘下げ、投影していける分野にありながら、結局、倭建命の詩情も古代人の息吹もわたしの心には入らなかった。それでいてわからず屋の空論を平気で書いてしまったのですから、恥ずかしながらです。あの頃の想い出。ゼロックスの匂い、国会図書館のひんやりとした空気に、真夏の古本屋街。

卒論が学生時代という流れの中でわたしの前に現われて来たようにはもう来ないということを淋しいと思ったのは、卒業してしばらくたった頃でした。

学生の頃のテスト、それに卒論は一種の区切りになっていて、確実に一歩一歩階段を上っているという実感を味わせてくれていた。その区切りはわたし自身が作ることなく、時の流れとともにやって来てくれたのです。そして卒論を出し、卒業証書を手にした時から、自分でテストを作り、卒論を書かない限り、時は階段なしに過ぎていってしまう。段落なしの時間の経過の早さは、過ぎていることさえも感じない程、空白なのです。

自分で作りあげずに階段を上りたいと思い、テストが恋しく、何かから卒業したく、卒論が恋しく、そういうテスト、卒論に対する発想が甘い生き方を意味していました。

今わたしにとって、卒論を曲がりなりにも形にしたということ、ただそれだけで、その時においても今の生活にも、ある一時期の点にすぎず、時々それに関した本や話題に注意が向くというその程度になっているけれど、やはり階段の一つを上ったことになっていたのだと思います。

階段の一段としての卒論はこれからどういう形で現われるのかしら、どんな入学が来て、どんな風に卒業していくのかしら。ただ時の点にすぎなくとも、これからの卒論はより国文科的？に自己の内面に入り込んでいくでしょう。そんな風にまだぼんやりと何か憧れているけれど、もう何か卒論を書かなければいけない時期に来ているなって考えているこの頃、どんなテーマにしょうかしら。

〈北原白秋と郷土〉

第三回卒業　古森　優子
（旧姓　高松）

曼珠沙華
GONSHAN GONSHAN 何処へゆく……
（GONSHAN お嬢さん・方言）『思ひ出』より

卒論の提出期限も差し迫ったあの頃、外科医の主人、六ヶ月の息子と下関の地に住むことが予想出来たであろうか。

二歳の日々、娘、妻そして母と今迄にない目まぐるしい変貌であった。移ろい易い時期に書いた卒論を振返って見ることは、懐かしい感傷に浸るだけではなしに、今を思いこれからを考える良い機会となった。

『思い出』の詩篇「わが生ひたち」の有名な一節に、「私の郷里柳川は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。」とある。

この「廃市」柳川を歩くことから私の卒論作業が始まった。勝手の分らない土地、未知の人、夕闇の迫る頃、一種の緊張、不安がつまきとって来た。何度か足を運ぶうち、そのような甘ったれ根性はどこへやら、厚かましくさえなり、土地の人とも親しみ、先行調査との異同、新発見にも出会う。

秋になり調査結果を文章に、飽く迄も事実だけを残すという目的の故、自身の体験、思いを表わせないそのじれったさ、名残り惜しさ。でも愈々追い込み、深夜の一人作業、作業そして作業、何日も